カリスマ社長の溺愛シンデレラ

～平凡な私が玉の輿（こし）に乗った話～

東京駅の北西に位置する「ホライゾン東京」は、日本屈指のオフィス街に建つ最高級のラグジュアリーホテルだ。今年で創業六十二年目を迎える老舗で、客室数は二百十七室。
世界的に権威のあるトラベルガイドで五つ星を獲得し、顧客には国内はもとより世界各国のＶＩＰがいる。
このホテルに最高級の愛着を持って働いている川口璃々は「常に笑顔で明るく」がモットーの客室清掃係だ。
時刻は午前七時三十分。
初夏の日差しがキラキラと眩しい金曜日。璃々は意気揚々と朝の街を闊歩する。
スーツやオフィスカジュアルを着た人達が大勢行き来する中、璃々はストライプのカットソーと紺色のコットンパンツ姿だ。
（嬉しい、楽しい、やる気満々～！）
璃々は現在二十三歳。
ウキウキで出勤してきたわけは、今日からエグゼクティブフロアにある客室の清掃を任されるよ

うになったから。そこは長期滞在のＶＩＰが使用している各種スイートルームがあり、その担当になるのは璃々が「ホライゾン東京」で働き始めた時からの夢だったのだ。

「おはようございます！」

従業員入口から建物の中に入り、ランドリー部の窓口でクリーニングされた制服を受け取る。

制服は係によってデザインが違っており、今から四年前にいっせいにリニューアルされた。

フロントなど、直接ゲストと関わるスタッフの制服は、白と黒がメインカラーになっており、そこにワインレッドやダークブルーなどの色を使った小物が加えられる。

璃々が普段着る客室清掃係の制服は、全体が黒でステンカラーの襟と袖の折り返し部分だけ白だ。ボトムスは黒一色だが、キュロットかパンツスタイルのどちらかを選ぶ事ができた。

そこにワインレッドのポケットチーフが加わり、必要に応じて同色のエプロンとウエストバッグがつく。同業他社の制服と比べても格段におしゃれだし、身に着けるだけでやる気が二割増しになるほど着心地がいい。

「おはようございます！」

ロッカー室のドアを開け、中にいる同僚達と挨拶を交わす。

ホテルの現場スタッフは、シフト制で勤務している人が多い。

璃々もその一人で、休みの日は土日祝日関係なく、だいたい週に二日だ。勤務時間は午前八時から午後五時の固定で、よほどの事がない限り残業はない。

それというのも、璃々は「クリーニングワーク」という清掃専門会社からの派遣社員であり、勤

務時間は同社と「ホライゾン東京」の契約内容に基づいているからだ。

「クリーニングワーク」からは璃々のほかにもスタッフが多数派遣されてきているし、聞くところによると派遣会社ごとに担当する時間帯が違うらしい。いずれにせよ「ホライゾン東京」は派遣先の中でもトップクラスの待遇の良さで、璃々にとってここで働ける事は喜びでしかなかった。

ロッカーのドアについた鏡を覗き込み、肩までの髪の毛をお団子ヘアにまとめる。

丸っこい目に常に口角が上がった口元。笑うと若干たれ目気味になる顔は、人に対してまったくといっていいほど警戒心を抱かせない。

昔から素肌にだけは自信があり、普段あまりメイクはせず色つきのリップクリームと薄いアイラインだけで済ませている。

鏡で襟の具合をチェックし、おくれ毛をすべてヘアピンで留めた。

（よし、これで準備オッケー。いざ、エグゼクティブフロアに出陣！）

頭の中で気合を入れ、ベッドメイク用のリネンやアメニティなどを載せたワゴンとともにエレベーターで最上階を目指す。今日担当するのは「ホライゾンスイート」と名付けられた客室で、広さが八十平米もある。

このサイズの部屋だと、通常清掃は二人がかりで行う。

けれど、ペアを組むはずの人が昨夜からの腹痛でお休みとなり、急遽璃々一人で作業する事になった。

客室マネージャーの桂から助っ人の提案をされたが、璃々はあえてそれを辞退した。

（だって、憧れの部屋だもの。一度くらい、一人きりの時間を味わいたいよね）
桂は五十代のベテランホテルマンであり、璃々とは比較的気心が知れている。こんな願ってもないチャンスを得られたのも、彼が璃々のワークスキルを高く評価してくれているおかげだ。
二十三階に到着し、ペールブラウンのカーペットが敷かれた廊下を行く。
目指す角部屋の前に到着し、中にゲストがいない事を確認してから入口のドアを開けた。
ストッパーでドアを固定し、逸る気持ちを抑えながらワゴンを押してリビングまで進む。
見えてきた景色は、これまでに見たどの客室よりも広く、息を呑むほど格調高い。
「ああ、憧れのホライゾンスイート……！　なんて素敵なの。さすが雰囲気も空気も違う」
正面に見えるテラスを配した窓の外には、都心のパノラマビューが広がっている。
室内の壁は落ち着いたクリーム色で、マホガニーのインテリアはすべてイタリア製だ。
一言で言えばゴージャスかつ、シック。
ラグジュアリー感溢れる部屋の佇まいは、きっと世界中のセレブリティを満足させるに違いない。
璃々はワゴンをリビングルームの端に置き、大きく深呼吸をした。軽くステップを踏みながら窓のカーテンを開け、部屋いっぱいに陽光を取り込む。
窓の外は部屋の三方向を囲む広々としたテラスになっていた。
「素敵すぎる……この部屋自体がパワースポットみたい！」
この部屋に泊まっているゲストは、長期滞在の日本人男性だと聞かされている。
『お忍びでいらっしゃるから、中で見聞きした事はくれぐれも内密に』

桂からそう言われ、いやが上にも緊張が高まる。立場上、彼はそれがどんな人物であるか知っているはずだが、その口ぶりからしてゲストはかなりのＶＩＰに違いない。
清掃にかける時間は、たっぷり一時間。
璃々は円形の鏡に映る自分を見て、拳を握りしめた。
「よし、客室清掃係、川口璃々。いつも以上に頑張るぞ！　ピッカピカに磨き上げて、ゲストをびっくりさせちゃおう！」
そう言うと、拳を天井に向かって突き上げる。
フロントなどと違い、客室清掃係は直接ゲストと関わる機会はほとんどない。だが、客室を介して繋がっていると感じるからこそ、丁寧な仕事をしてゲストに心地よい時間を過ごしてほしいと思っている。
ホテルという日常から少し離れた空間を楽しんでもらいたい。
璃々は心を込めて仕事をすれば、きっとゲストにもその気持ちが伝わると信じている。
手始めに全室のゴミ箱を空にし、リネンやタオルなどを専用のクリーニングボックスの中に入れる。ワゴンから新しくリネン類を取り出し、それぞれの位置にセットして少し離れた位置から出来栄えをチェックした。
「いつもながら、うちのリネンは肌触り抜群だなぁ」
「ホライゾン東京」はリネンや従業員の制服などのすべてを自社でクリーニングしており、担当するランドリー部門の仕事ぶりには定評がある。

むろん、各部署のスタッフもプロ意識が高く、同業他社に比べても頭ひとつ抜きん出ている。
それは日頃から社員教育に力を入れ、スタッフであると同時に人としても常に成長を目指す社風があってこそのものだ。
ベッドメイクを済ませたあとはバスルームを掃除し、水切りをしている間にトイレ清掃に取り掛かった。掃除はテンポよく、時間を有効に使いながら進めるのが理想だ。
部屋の一画には横長の執務机が置かれ、正面の壁には大型の鏡が取り付けてある。
業務用の掃除機をスタートさせて、ベッドルームから順に床の細かな塵を徹底的に吸い上げていく。それを済ませると再度バスルームに戻り、水滴ひとつ残らないように天井から壁までピカピカに磨き上げる。
大理石の床も同様にしたあと、洗面台のアメニティのチェックをした。
「ホライゾン東京」で用意されているものは、すべて英国のオーガニックブランドのもので部屋のディフューザーも同じ会社のものを使用している。
「いい香り……。うちのホテルの備品って本当に最高。ここに泊まるだけで本物のお姫様になった気分を味わえるよね」
ホテルに対するよくある苦情のひとつに「室内の匂いが気になった」というのがある。
しかし「ホライゾン東京」に限ってはそんな声はめったに聞かないし、璃々も清掃係としてその点は特に注意して日々メンテナンスを行っていた。
特別鼻が利くわけではないが、仕事柄、匂いに関しては人一倍気にかけるようにしている。

「床掃除よし！　それにしても、ぜんぜん散らかってないし汚れてないなぁ」
ひととおり清掃を終えると、璃々は感心したように呟く。
「ホライゾン東京」で働き始めて五年目になるが、部屋の状態を見ればゲストの性格が多少なりともわかるようになった。
綺麗好きな人や、散らかっていてもまったく気にしない人。
ホテルを公共のものと捉えている人と、完全に私物化してしまう人。
アトラクションと勘違いして、ベッドで飛んだり跳ねたりするのはまだ序の口で、壁や天井を破壊して高額な弁償金を請求される人もいた。
この部屋を使っている人は、間違いなく几帳面で気遣いのある人だ。
ゴミの捨て方も丁寧で、テーブルの上も綺麗に片付いている。
もしかすると凄腕のビジネスパーソン？
もしくは、悠々自適に暮らす白髪のご隠居とか。
いや、来る時にランドリー係から託されたゲストのスーツには、若い男性が身に着けそうなネクタイが添えられていた。
（若くてリッチな億万長者ってとこ？　御曹司かな？　それとも起業して大成功を収めた実業家だったりして）
いずれにせよ、ここまで綺麗に片付いていると、少々手持ち無沙汰だ。もちろん、だからといって手を抜いたりしないし、清掃作業にかける熱量は散らかり放題の部屋と変わらない。

ただそうはいっても、手間がかからない分作業時間は短くて済んでしまう。時計を見ると、掃除を始めてからまだ四十分しか経っていない。
「あとはウォークインクローゼットの整理整頓をして、と」
璃々はクリーニングから戻ってきたスーツを持ってベッドルームに向かった。入口横の壁にあるウォークインクローゼットの扉を開け、スーツをハンガーパイプに掛ける。
ゲストの私物が置かれたそこは、今回のように依頼がある時以外は開けない決まりになっている。用事を済ませるついでにチラリと中の棚を見ると、ちょうど目の高さにキラキラ光るハイヒールが置かれているのを見つけた。
よく見ると、それは透明のガラスでできており、表面にはたくさんのクリスタルで美しい模様が描かれている。
璃々は吸い寄せられるようにガラスの靴に近づき、笑みを浮かべた。
「素敵……まるでシンデレラの靴みたい」
この靴にはそう思わせる気品と魅力があった。
「いいなぁ。この靴に似合うのは、同じくらいキラキラのドレスだよね。髪はアップスタイルにして、綺麗にメイクもして――」
気分はまるで舞踏会に行く前のシンデレラだ。
璃々はガラスの靴を見つめながら、夢いっぱいの想像を広げていく。
虐げられ、日々掃除と洗濯に明け暮れる自分のもとに、ある日魔法使いのおばあさんがやって来る。そして、おばあさんの魔法で美しく変身させられ、白馬の豪華な馬車で王子様の待つ舞踏会に出かけるのだ。
「王子様――私の運命の人、あなたはどこにいらっしゃるの？」
璃々はシンデレラのつもりになって、空想の中の王子様に呼びかける。
「早く迎えにいらして。私は、あなたが迎えに来てくれるのを待っているのですよ」
「ここだ。ほら、迎えに来たよ――」
いきなり背後から声をかけられ、そのままバックハグをされた。
「きゃあっ！」
突然の事に驚いて声を上げる。ハグを解こうと腕を振り上げた途端、どこかに手が当たり、バランスを崩して倒れそうになる。その背中を支えられると同時に何かが割れる音が聞こえた。
「大丈夫か？」
音に反応する暇もなく、鼻先から二十センチのところに見える顔が話しかけてきた。凛々しい眉に、やや切れ長な目。その見る者を圧倒するほどの美男には、見覚えがあった。
それが誰だかわかった途端、璃々は目を剥いて息を呑んだ。
「み、三上社長っ!?」
類まれな容姿と存在感を放つ彼は、「ホライゾン東京」の社長にしてＣＥＯの三上恭平だ。
どうして彼がここに？
（まさか、三上社長がここに長期滞在中のゲストなの？）

璃々は混乱しつつ、周囲に視線を彷徨わせた。
すると、目の前の棚にあったはずのガラスの靴がない。
あわてて下を向き、一瞬で血の気が引く。
そこに粉々に割れたガラスの靴の破片が散らばっていた。
「……ガ、ガラスの靴が……！」
「ああ、粉々だな」
「も、申し訳ありません！　私、とんでもない粗相を――」
璃々は三上の腕を離れ、深く頭を下げる。そして、すぐにしゃがみ込んで破片を拾おうとした。
「あぶない！　怪我をするぞ」
三上に手首を握られ、ハッとして顔を上げた。深みのある黒茶色の瞳と目が合い、そのままじっと見つめられる。
その強い目力に圧倒され、璃々は瞬きすらできないまま彼の目を見つめ返した。
「ほ、本当に……申し訳あり……ませんでした。あの、靴が……すごく綺麗で、つい見惚れてしまって……」
話す声が上ずり、身体が震える。
いったい、どう詫びればいいのか……
話し始めたのはいいが、動揺してうまく喋る事ができない。すると、三上が指で璃々の顎をクイ、と上向かせてきた。彼の顔は、身長百五十六センチの璃々よりも三十センチくらい上にある。

「君、名前は？」
顔をグッと近づけられ、思わずあとずさりするも、すぐに背中が棚に当たって動けなくなる。
「か、川口璃々と申します」
璃々が名乗ると、三上の視線が一瞬だけ胸元のネームプレートに移った。
「川口璃々、か……。いい名前だ」
「あ……ありがとうございます」
三上が僅かに目を細めながら、璃々にじっと視線を這わせてくる。その目は怒っているようには見えない。けれど、いったいなぜこんなにジロジロ見られているのだろう？
璃々は怯えながら彼の視線を受け続ける。
「ここで働き始めて、どれくらいになるんだ？」
「こっ……今年で、ご、五年目になります」
「ふむ……じゃあ、僕よりも一年先輩ってわけだ」
顎を持つ三上の指が、璃々の首をそっと撫でた。
「ひっ……！」
思わず声が出て、身体が少しだけ前のめりになる。そのせいで三上との距離がより近くなった。
「じゃあ当然、寄託物等の取扱いについての約款は頭に入っているね？」
「は、はい、もちろんですっ……！」
寄託物等の取扱い・第十五条――

ゲストが客室内に持ち込んだ貴重品について、ホテル側の故意又は過失により破損が生じた時は、ホテル側がその損害を賠償する。ただし、ゲストからあらかじめ貴重品の種類及び価額の明告のなかったものについては、ホテル側に故意又は重大な過失がある場合を除き十五万円を限度とする。

璃々はそれを要約して唱え、唇をきつく結んだ。

ガラスの靴を落としたのは自分だし、賠償は免れない。

仮に三上がガラスの靴の所持をホテル側に伝えていなかったとしても、璃々がしでかした事は重大な過失にあたるだろう。

璃々の頭の中に、最悪の事態が思い浮かぶ。

それだけはダメだ！　璃々は勢い込んで三上に訴えかけた。

「あのっ……私、どんな事をしてでも靴の弁償をします！」

「君が？」

「はい。ちなみに、ガラスの靴はおいくらくらいするものなんでしょうか？」

「あの靴はブライダルフェアのシンボルとしてホテル内に展示する予定のものだ」

チャペルのリニューアルオープンの件なら璃々も知っているし、その記念として開催されるフェアはかなり大規模なものになると聞かされている。

そんな大事なフェアのシンボルを壊してしまったなんて……

璃々は三上を見つめながらいっそう青くなり、事の重大さに唇を震わせた。

「チャペルリニューアルは僕が提案して、直接関わって進めている一大プロジェクトだ。当然、そのシンボルとなるガラスの靴も僕自らが制作に関わった特注品だ。それを、君個人が弁償すると言うのか？」

三上に問われ、璃々は彼に顎を持たれたまま頷いた。

「君はホテルの従業員だろう？　だったら、まずは上司に報告してホテル側が損害の賠償をすれば済む話だ」

「私は従業員ではなくて『クリーニングワーク』からの派遣社員です」

たとえホテル側が賠償して事なきを得ても、損害金額を計上されるし、璃々は間違いなくクビになるだろう。

「ホライゾン東京」の人事部が多額の損害をもたらした璃々をこのまま働かせてくれるとは思えないし、そうでなくても「クリーニングワーク」側が人員の交代を申し出るはずだ。

「私ここを辞めたくないんです！　ようやく『ホライゾン東京』で働く夢が叶ったのに……どうか、お願いします――」

話しているうちに、危うく涙が零れそうになる。

璃々は顔を俯け、急いで瞬きをして涙を振り払った。

「夢か。じゃあ、どうしてそんな夢を持つようになったのか、教えてもらえるかな？」

三上が興味深そうな顔でそう訊ねてくる。なぜそんな事を聞かれるのか不思議に思いつつも、璃々は藁にもすがる気持ちで話し始めた。

「私が小さい頃、一度だけここに泊まった事があるんです。両親は、もう十五年前に離婚していま

すが、その時はまだすごく仲がよくて……」
宿泊した当時、「ホライゾン東京」では夏休み用にさまざまなイベントが実施されており、璃々は親子三人でそれに参加しにきたのだ。
「素敵な部屋と美味しい食事――本当に楽しくて、何もかもが夢のようでした。スタッフの皆さんもとても優しくしてくれて、その時の記憶は今もはっきりと残っています。私にとって家族との一番幸せな思い出はここに泊まった時の事なんです」
その時の光景が頭に思い浮かび、璃々は我知らず口元に笑みを浮かべた。
「このホテルには私の夢が詰まっているんです。お金を貯めて、おしゃれしてショッピングをしてみたいし、レストランで食事したり、素敵なラウンジでお酒だって飲んでみたい。そして、もう一度、ゲストとしてここに泊まりたい。それに、私、いつか素敵な人とここで結婚式を挙げるのが夢なんです……」
璃々にとって「ホライゾン東京」は、憧れの場所であり幸せの象徴だった。
三上は微笑みを浮かべながら、じっと璃々の話を聞いている。
つい熱く語ってしまい、璃々は急に自分の発言が恥ずかしくなって下を向いた。
「わかった。君がそこまで言うなら、靴の破損については会社には言わないでおこう。そもそもこの状況は、僕が君を驚かせたせいだから弁償も必要ない」
「えっ？　でも――」
言われた事に驚き、璃々は目を大きく見開いて顔を上げた。

「実は声をかける前、隠れて君の仕事を見させてもらっていたんだ。君は、すべての過程を手際よく完璧にこなしていたね。そんな優秀な人材をクビにしたりしないよ」
三上が呆然とする璃々の手を強く握り、目をじっと見つめてきた。
近すぎる距離と慣れないスキンシップのせいで、心臓がバクバクする。
「え……でも、この靴って、相当高価なものですよね？　弁償しなくていいなんて、そんな事はできませんっ」
「気にするな」
「きっ……気にしますよ！　何か償う方法はありませんか？　私にできる事ならなんでもしますから」
勢い込んでそう訴える璃々に、三上が何やら思案顔をする。
「なるほど。君は僕が思っている以上に真面目で律儀な女性なんだな」
彼はおもむろに璃々の顔に手を伸ばし、掌で頬をすくい上げた。
「ひとつ聞くが、君は今、恋人がいるか？」
「いっ……いえ、恋人はいませんし、いた事もありません」
またしても余計な事を言ってしまい、璃々はしまったとばかりに渋い顔で口を噤んだ。
「ほう、だったらキスは未経験？」
「……はい」
蚊の鳴くような声で返事をした途端、三上が満面の笑みを浮かべた。彼は色気たっぷりの視線を

璃々に注ぎながら、鼻の先ほどの近さに顔を近づけてきた。
璃々は彼の圧倒的な魅力に呑み込まれ、身動きができなくなる。
「では、償いに君のファーストキスをもらおうか」
「へ？」
思わず首を傾げると同時に、唇を重ねられる。
いったい、何が起こっているのか――
何も考えられないまま固まっていると、三上に腕に背中と膝裏をすくわれ、あっという間にベッドまで連れていかれた。
仰向けの状態でベッドの上に寝かせられているうちに、三上の舌が璃々の口の中に入ってくる。唇の内側をゆっくりとなぞられ、気がつけば身体全体が熱く火照っていた。
抱き寄せてくる腕に力を込められ、璃々はいつの間にか閉じていた目をゆっくりと瞬かせた。目の前にある三上の瞳がまるで宝石のように綺麗だ。
それに魅入られた璃々は、うっとりと目を閉じて彼にされるままキスを受け続ける。
「とても柔らかくて気持ちのいい唇だな」
唇が離れ、呟くようにそう言われた。
ハッと我に返り、大きく目を開けた先に三上の微笑んだ顔がある。
「し、失礼しますっ！」
璃々は弾けたポップコーンのようにベッドから起き上がり、転がるようにして床に下りた。

頭の中は真っ白で、処理能力を完全に失っている。
とりあえず、ここから逃げなければ――璃々は大急ぎで三上に背を向けると、脱兎のごとくベッドルームから逃げ出したのだった。

その日、自宅アパートに帰り着いた璃々は、靴を脱ぐなり床にうずくまってわなわなと身を震わせた。
「嘘だ嘘だ……あれは夢？　ううん、確かに現実だった！　だけど、なんであんな事……あああ、何がなんだかわからない～！」
そのままズルズルと冷蔵庫の前まで移動し、中から緑茶を入れたドリンクボトルを出してがぶ飲みする。
冷えたお茶が胃袋に落ちていくのを感じて、璃々はようやく少しだけ落ち着きを取り戻した。
いったい、自分に何が起きたのか……
ガラスの靴を粉々にしてしまった事以外は、何ひとつ理解できない。
「なんのつもり？　いきなりキスとか、ぜったいにおかしいよね？　しかも、それが靴を壊した償いだなんて……そんなのあり？　あり得ないよね!?」
ベッドで三上にキスをされたあと、璃々は自分史上最速で道具を片付けてホライゾンスイートから逃げ出した。それだけならまだしも、焦るあまり、割れたガラスの靴を放置したままにしてきてしまったのだ。

（何やってんのよ！　貴重な品を壊した上に、それをほったらかしにしたまま逃げるなんて……。おまけにファーストキスまで奪われて、拒むどころかうっとりして受け入れちゃったりして――）

我ながら、なんという事をしでかしてしまったのだろう！

悔やんでも悔やみきれないし、情けなさすぎて言葉も出ない。

今日一日、なんとか何食わぬ顔をして仕事を続け……たつもりだったが、同僚達からは様子が変だと訝しがられてしまった。

だいたい、どうして大人しくキスを受け入れてしまったのだろう？

普通ならビンタしてセクハラ行為だと怒鳴りつけてもいいくらいだ。

（だけど、相手は社長だし、もともと非はこっちにあるわけだし……。だからって、ファーストキスを奪われていいわけないよね？　でも、あの時はそんなの考えられないほど頭の中も身体もフワフワ飛んでるみたいになって……）

のろのろと立ち上がり、リビングのテーブルの前に腰を落ち着ける。

ついさっきコンビニで買ってきた豚丼入りのエコバッグをかたわらに置き、今一度首を傾げた。

三上の事は派遣先の社長として以前から知っていた。もちろん、彼がとびきり優秀なイケメンエリートである事も承知している。

けれど、ただそれだけ。何度かホテル内を歩いている三上を見かけた事はあるが、当然話す機会もなければ、近くで挨拶を交わした事すらなかった。

以前、親しい同僚と話している時、冗談で「あんなイケメン社長が恋人だったらなぁ」と言った

事はあるが、本気でそう思っていたわけではない。

それどころか、璃々は特別イケメン好きでもないし、玉の輿を狙うなんて考えを持った事すらなかった。

それなのに、どうして好きでもない男性に唇を奪われて無抵抗でいたのか……

「……もしかして、三上社長にキスされて恋に落ちちゃったとか？」

ふいにそんな考えが頭をよぎり、あわてて首を横に振って否定する。

「まさか！　そんな事あるわけない！　たった一度のキスで心を奪われちゃうとか……ない、よね？」

言いながら、知らず知らずのうちに指で唇を摘まんだ。

（ううん、あれは一度じゃなかった……。何度も何度も……私、なんで拒まなかったの？　償いって言われたから？　それとも、社長とのキスがすごく甘かったから……？）

まるで小鳥がエサをついばむようなキスや、蜂蜜を口の中に流し込まれるみたいなディープなキス。どれもはじめての経験だったのに、うまくリードされて気がつけば無抵抗のままベッドの上で寝そべっていた。

あの時の三上からは獰猛な雄の匂いがした。男性経験がない自分がそうはっきりと感じたのだから、これはもう間違いない。

（……って事は、三上社長はあの時私を一人の女性として見ていたのかな？　もしあのままキスをやめずにいたらどうなっていたんだろう……）

摘まんだ唇が、いつの間にか熱く火照っている。
璃々は急いで唇から指を離した。
「――って、やめやめ！　そんなわけないでしょ。何考えてんのよ、まったくもう……お腹空いてるとロクな事考えないよね」
自分自身にそう言い聞かせ、エコバッグから豚丼を取り出す。
店内で温めてもらったから、すぐに食べられるし電気代もかからない。割り箸を割り、いただきますを言って最初のひと口を食べた。
「美味しい～。やっぱこれだよねぇ」
璃々がハマっている豚丼は、甘辛ソースが絶品で豚肉もふっくらとして柔らかい。期間限定だからいつもあるわけではないが、毎年この時期になると食べたくなってしまう。
もっとも普段の璃々はもっぱら自炊専門で、外食はもちろんコンビニすら滅多に行かない。
けれど、今日はなんといってもエグゼクティブフロアの担当第一日目だし、いろいろあって疲労困憊だった。そんな自分を労おうと、奮発して六百円のコンビニ飯を買ったのだ。
我ながらつくづく安上がりだと思うが、本当に美味しいのだから仕方がない。
もりもりと食べ進め、唇についたソースを舌先で舐めとった。それをきっかけに、またもや三上の顔が思い浮かび、唇にキスの感触が蘇ってくる。
「もうっ……なんでまた思い浮かべちゃうのよ。あれは償い！　三上社長が私なんかを本気で相手するわけないでしょ！」

三上はまだ三十代前半の独身で、誰が見ても納得の美男だ。そんな地位もお金もあるハイスペックな彼が、何を好き好んで自分のような非モテ女子を相手にするだろうか。
あれは、あくまでガラスの靴を割った償いとしてのキスだ。
（でも、償いがファーストキスだなんて……）
確かにファーストキスはたった一度のものだし、特別な意味のあるものには違いない。
けれど、だからといって、あれほど高価なガラスの靴を割った代償になるだろうか？
とびきり美人のファーストキスならわかるが、璃々はごく普通のどこにでもいる一般女性だ。
（やっぱりきちんと弁償したほうがいいよね。そのほうがすっきりするし、負い目を感じながら働くなんて、ストレスでしかないよ）
弁償するとなると今以上に節約生活を強いられる事になるし、六百円のプチ贅沢も今日で最後になるだろう。
けれど、ビクビクしながら働くよりましだ。それに、その程度でへこたれるような弱い自分ではない。もし仮に「ホライゾン東京」での仕事を失う事になっても、また働かせてもらえるよう努力すればいいのだ。
「どんな結果になっても、頑張るしかない。私にはそれしかできないもの」
璃々はそう固く決心すると、いつも以上にしっかりと味わいながら、残りの豚丼を黙々と食べ進めるのだった。

次の日出勤すると、ロッカー室がやけに賑わっていた。
何事かと思い仲のいい同じ客室清掃係の春日詩織に訊ねると、話題は三上に関する噂話だった。
「さっき聞いたばかりなんだけど、三上社長って田丸果歩と付き合ってるんじゃないかって噂なのよ」
詩織が小声でそう言うと、周りにいる同僚達が揃って首を縦に振った。
「えっ……田丸果歩って、女優の？」
「そうそう。ついこの間、うちに出入りしてる配送業者の人が一緒にいるところを見かけたんだって。周りにも気づいてる人が大勢いたっていうし、そのうち写真週刊誌に載るかもね。まあ、彼女の所属事務所って大手だから、揉み消されちゃう可能性大だけど」
「へ、へえ……」
璃々は着替えをしながら、今自分の中で気になる人ナンバーワンの話題に耳を傾けた。
「三上社長ってさ、なんかミステリアスっていうか謎めいてるよね」
別の同僚が話に加わり、さらにもう一人情報通と言われる古参社員の河北が口を挟んでくる。
「あれだけのイケメンだし、実はもう妻子持ちだっていう噂だってあるのよ」
「嘘っ……ほんとに？」
「ほんとよぉ。……いい？　ここだけの話よ……実は奥さんは日本人じゃなくて、子供と一緒に海外の別宅に住んでるって話まであるんだから」
「マジで⁉　そういえば三上社長ってどこに住んでるの？」

「さあ……たぶん都心のタワマンとかじゃないかな？　それはともかく、三上社長って優しそうじゃない？　だけど、ああ見えて実は結構なドSで、別宅住まいなのはそれが原因なんじゃないかって説もあるのよ」
「え～！　本当だったらちょっとショック～。でも、以前海外にいたわけだし、あり得なくはないか」
同僚達の会話を聞き、璃々は一人表情を強張らせる。
「ちょっと、璃々。どうかしたの？　なんだか固まっちゃってるけど……」
「へ？　あ……ううん、なんでもないの」
詩織に見とがめられ、咄嗟に作り笑顔で誤魔化す。
「もしかして川口さんも隠れ三上社長ファンだったりして～」
「いるいる、興味なさそうにしてて実は本気で玉の輿狙ってる人～！」
皆にはやし立てられ、璃々はどう返そうかと笑いながら逡巡する。その時、唯一インカムをつけていた河北がイヤーモニターを押さえた。
「はい、わかりました。今ここにいますから、伝えます――川口さん、桂マネージャーがお呼びよ。今すぐに事務局に行ってちょうだい」
「はいっ！」
璃々は渡りに船とばかりに、そそくさとロッカー室を出て事務局に向かった。
（なんだろう……）

璃々は歩きながら首をひねった。
（なんにせよ、ちょうどよかった。桂マネージャーに昨日の事を報告して、どうすればいいか相談しよう）
彼は直属の上司だし、ホテル内で一番頼れる存在だ。さすがにキスの件は伏せておくつもりだが、自分が犯したミスについて報告して、対処法を教えてもらおうと決心する。
事務局に行き、桂のデスクに向かう。すると、パーティションの向こうから桂がひょっこりと顔を出した。
立ち上がった彼は、璃々に手招きしながらミーティングルームのほうを指した。事務局では話せない内容なのだろうか？
璃々は桂のあとをついて部屋に入った。
「おはようございます。あの、桂マネージャー……」
「はいはい、とりあえず座ろうか」
桂が長テーブルの角の席を示した。
璃々は角を挟んで桂の斜め前の椅子を引き、神妙な面持ちで腰を下ろす。どう切り出そうかと思っていると、桂が先に口を開いた。
「実は今朝一番に連絡があって、三上社長が君を部屋の専属清掃係にしたいと言ってきた」
「えっ！　三上社長が私を部屋の専属清掃係に？」
オウム返しに訊ねると、桂が口の前に人差し指を立てて「しーっ」と言った。

「す、すみません」
「いや、三上社長があの部屋に住んでいる事は、ごく一部の人間にしか知らされていないからね」
桂が言うには、知っているのは数人の役員と部長のほかは、エグゼクティブフロアのコンシェルジュとフロア専用のラウンジにいる従業員くらいらしい。
「なんでまた、そこまで秘密にしてるんでしょう」
「ご自身のプライベートを守りたいのと、おそらく一ゲストとしてホテルサービスのチェックをしようというお気持ちがあるんだと思う」
なるほど、そういえば以前、海外の番組で大会社の社長が見習い社員のふりをして従業員の仕事ぶりをチェックする、というのを見た事がある。
「三上社長は、昨日の君の仕事に対する姿勢や手際の良さを大層気に入ったそうだ。おかげで川口さんをエグゼクティブフロアの担当に抜擢した私まで褒められたよ」
桂が興奮気味にそう話し、少しずれた眼鏡を指で押し上げる。
一方、璃々はどうして自分があの部屋の専属清掃係に指名されたのかわからずに困惑するばかりだ。
「あの部屋に近づけるのは、事情を知っている者のほかは専任の客室清掃係だけだ。それに抜擢されるなんて本当にすごい。それだけ川口さんの清掃係としてのスキルが高いという事だよ」
桂が嬉しそうに相好を崩す。これ以上ないくらい厚い信頼を寄せられ、璃々はガラスの靴の件を言い出しにくくなってしまった。

「とにかく、三上社長は川口さんの仕事ぶりを高く評価されたんだ。いやぁ、直属の上司として私も鼻が高いよ」
そう言って桂は、注意事項を書いた紙を渡してくる。
清掃時間は午前十時から午後零時。ただし、清掃にあたるのは二人ペアではなく璃々一人で、三上の事はもちろん専属担当になったいきさつも一切口外してはならないとあった。
「え、私一人、ですか？」
「その代わり、清掃時間は二時間に増えたからね。くれぐれも、見落としがないようにお願いするよ」
二人ペアならまだしも、自分だけだなんて……！
いったいなぜ一人で作業をさせられるのだろう？　もしかして、償いはあれだけではなかったのでは……。そうであれば、また昨日と同じような状況に陥らないとも限らない。
そう考えた璃々は、青くなって今一度桂に自分の失敗の件を話そうとした。
「あの、桂マネージャー……」
「まあ、そう硬くならずに、これまでどおり真面目にやってくれたらいいんだ。川口さんなら大丈夫。私はそう信じてるよ」
表情の強張りを緊張と取り違えたのか、桂が璃々の目を見ながらにっこりする。そこまで見込まれては、もう引き受けるよりほかない。
「ま……任せてください。桂マネージャーのご期待に沿えるよう、心して取り組みます」

璃々の言葉に、桂が大きく頷きながら立ち上がった。
「よく言った！　じゃ、さっそくお願いするよ。今日は昨日と同じで午前八時からスタートで。専属の件は、あとで私から皆に言っておくから」
「はい、お願いします」
時刻は午前八時十分前。
璃々は退室すると、すぐに準備をしてエグゼクティブフロアに向かった。
（もしかして、三上社長はお部屋にいらっしゃるのかな……ああ、気まずすぎる！）
いったい何を思って彼は自分を専属の清掃係にしたのだろう？
本当に仕事を評価してくれた結果なのか、それとも昨日の出来事が関係しているのか……
ならば、やはり弁償を申し出て、正当な埋め合わせをすべきだろう。
エレベーターを降りて「ホライゾンスイート」に向かいながら、璃々はなるべく冷静でいようと呼吸を整える。
エグゼクティブフロアの廊下はゆったりとしており、カートが二台並んでも余裕ですれ違う事ができた。もっともこのフロアは客室数が少なく、そんな機会はめったにない。
歩き進め「ホライゾンスイート」のドアの前に立つ。
昨日はドアノブに「掃除してください」と書かれたルームプレートがかけてあったが、今日は何もかけられていない。つまり三上が中にいるという事だ。
恐る恐るドアをノックすると、中から「どうぞ」という三上の声が聞こえてきた。

覚悟を決めてドアを開け、カートを押しながら中に入る。
すると、三上が廊下の向こうからやってきてカートを引いてくれた。
「ドアを閉めてくれるかな？　掃除の前に少し話したいから」
そう言われ、璃々はドアストッパーを置こうとした動きを止めた。
「はい」と返事をしてリビングに向かい、部屋の真ん中でかしこまる。
「昨日は、ちょっと油断した隙に見事に逃げられたな。僕から逃げ出した女性は君がはじめてだよ」
三上が話しながら璃々の前まで来て立ち止まった。いきなり昨日の件を持ち出され、否応なく彼とのキスを思い出してしまう。
璃々は頬を赤く染めつつも、なんとか頭を切り替えて表情を引き締めた。
理由はどうあれ、挨拶もしないまま部屋から逃げ出したのは確かだ。
「申し訳ありませんでした。あの時は気が動転してしまって……」
「いや、謝るのは僕のほうだ。同意なしに君のファーストキスを奪ったんだから」
三上の低くのびやかな声が、やけに耳の奥に響く。
人と話す時は極力目を合わせるよう心掛けているが、さすがにこんな近くでは彼の顔をまともに見る事ができない。
璃々は早々に視線を下に向けて、唇を硬く結んだ。
「だが、君はまた僕のところに来てくれた。それは僕の事を許してくれている、と受け取っていいのかな？」
指先で前髪をそっと摘まれ、思わず身体がピクリと跳ね上がった。
「ゆ、許すも何も、自分にできる事をすると言ったのは私ですから。ただ、私がこの部屋の専属清掃係になったと聞いたので、その理由が気になっていて――」
「もちろん、君の清掃係としてのスキルを高く評価したからだ。ふむ……その顔は、もしかして昨日の件でまだ償いをさせられるとでも思ったのか？」
ズバリと指摘され、璃々はたじたじとして口ごもる。
「そ、それは……」
「やはりそうか。そんな心配は無用だ」
専属に選ばれた理由が三上に仕事を評価されたからとわかり、璃々は素直に嬉しく思った。
けれど、本当にキスだけで償いを終わらせてしまってもいいのだろうか？
璃々は今ひとつ懸念を拭えないまま、三上の顔をまっすぐに見た。その顔を見た彼が、僅かに口元を綻ばせる。
「昨日も言ったとおり、あの靴をオーダーしたのは僕個人であって、持ち主は僕だ。その僕が言うんだから、もう気にしなくていい。それに、君はもう十分償ってくれたはずだろう？」
三上が意味ありげな顔をして璃々の唇をじっと見つめてくる。
途端にキスの感触が唇に蘇り、璃々は視線を泳がせた。
一晩中いろいろと悩み抜き、何年かかっても弁償すると決めたし、仕事をクビになる覚悟もした。

それなのに、三上は償いを昨日で終わらせてくれたばかりか、自分をこの部屋の専属清掃係に指名してくれた。いくらファーストキスを奪われたとはいえ、これではどう考えても申し訳なさすぎる。

「だったら、私で何かお役に立てる事はありませんか？　体力なら自信がありますし、使いっぱしりでもなんでもします！」

璃々は勢い込んで、そう訊ねた。

「必要なものがあれば自分で買いに行くし、何かあればエグゼクティブフロア専属のコンシェルジュがいる」

「――で、ですよね」

思案顔で黙り込むと、三上が腰を落として璃々の顔を覗き込んできた。

「だが、君がそこまで言うのなら、君にしかできない事をしてもらおうかな」

その言葉に、璃々は思わずぱあっと顔を輝かせた。けれど、ニンマリと微笑んでいる彼の顔を見て、あわてて掌で口元を覆う。

「キ、キス以外でお願いします！」

言いながら顔が赤くなるのが、はっきりとわかった。

「なんだ、もうキスはダメなのか。それなら、明日一日、僕に付き合ってもらおうかな。君は明日と明後日は休みだろう？」

仕事は週休二日制で、基本的に連日で休める。ホテルの清掃係という仕事上、祝日や曜日など関係ないが、今回はたまたま土日が休みに当たっていた。

「はい、確かにそうですが……」

社長ともあろう人が、なぜ一派遣社員のスケジュールなんか把握しているのだろう。璃々が怪訝な顔をしていると、三上が僅かに片方の眉尻を上げた。

「何か予定でもあるのか？」

「い……いえ、何もありません」

「では決まりだ。明日、僕とデートしよう」

「デ、デート!?」

「時間は午前九時。待ち合わせ場所はこの部屋だ。もちろんデート代はぜんぶ僕が持つし、特に何も準備はいらない」

そう言うなり三上の手が伸びてきて顔を上向きにされた。同時に腰を強く引かれて、向き合った状態で身体がぴったりと密着する。屈み込むようにして顔を近づけられ、互いの鼻先までほんの数センチの距離になった。

「どうだ？　僕の誘いに応じてくれるか？」

見つめてくる三上の視線が、璃々の目から唇に移った。思わせぶりな目つきに、頬があり得ないほど熱くなってくる。

「キッ……キスはダメですよ！　さっき、そう言ったはずです！」

「だが、今はもう気が変わってるかもしれないだろう？」

「そ……そんな、まだ三分も経ってませんよ」
「そうか？　君とのキスを待ち望む身としては、一分が一時間にも感じられるんだが」
「な……何をおっしゃってるのか、わかりませんっ……」
三上はイケメンである上に仕事もできて、社長に就任して以来業績はうなぎのぼりだ。そんなカリスマ社長の彼が、一介の客室清掃係相手に何を言い出すのだろう？
きっと、からかい半分の言動に違いない――そう思い精一杯抵抗をするけれど、三上の熱い吐息を唇に感じて、早くも気持ちがくじけそうになっている。
「わからない？　じゃあ率直に言おうか。僕は君とキスがしたい。君が僕にキスを返してくれるまで何度もキスをしたいと思ってる。わかったかな？」
「わっ……わかりません！　ぜんぜん、まったくもって理解不能です！」
璃々は言い終えるなり屈(かが)み込んで身をよじり、なんとか三上の腕の中から逃れた。体勢を整える間もなく走り出し、リネンカートの陰に身を隠す。
「ふっ、また逃げられたか。君はなかなかすばしっこいな」
璃々はカートの陰から顔を出し、なんとも言えない表情を浮かべた。この場合、なんと返せば正解なのだろう？
璃々が思案している間に、三上が少しだけ乱れたスーツの襟(えり)を正した。
「だが、今度捕まえたらぜったいに逃がさないから覚悟しておくように。それじゃ、あとは任せたよ」

そう話す顔が、いつの間にかビジネスライクになっている。
「はい、かしこまりました」
璃々は即座に姿勢を正し、仕事モードで返事をした。
「ああ、そういえば――」
三上がカートに近づき、何かしら探すようなしぐさをする。
「何かご入用ですか？」
アメニティの不足でもあったのかと彼のほうに一歩近づいた途端、カート越しに三上が急に璃々の腰に手を伸ばしてきた。
逃げる暇もなく一気に距離を縮められ、腰と顎(あご)をしっかりと捉(とら)えられてしまう。
「捕まえた。覚悟はいい？」
「えっ？　わわっ……んっ、ん……」
答える暇もないまま、半ば強引に唇を重ねられた。
キスを拒絶してから五分と経っていないのに、もう足元をすくわれるような事態に陥(おちい)ってしまうなんて……
馬鹿なの？　いくらなんでも、隙がありすぎでしょ！
頭の中で、自分自身にツッコミを入れる声が聞こえてきた。
今すぐに逃げださないと！
そう思うものの、もうすでに彼の唇に囚(とら)われて抵抗すらできなくなっている。

璃々は早々に白旗を揚げた。そして己の不甲斐なさを情けなく思いながらも、三上とのキスに溺(おぼ)れていくのだった。

次の日の朝、璃々は目覚まし時計が鳴る前に目を覚まし、かれこれもう一時間近くベッドの上で鬱々(うううう)としている。

一度ならず二度までも三上に唇を奪われてしまった。

『今日のところはこれで終わりだ。残念だが、これ以上続けると約束の時間に遅れてしまう』

そう言われて、はじめて自分が彼の背中に手を回している事に気づく始末。

恥ずかしい事この上ないし、チョロすぎて自分で自分を蹴り飛ばしたいくらいだ。

イケメンハイスペック男子の三上にとって、恋愛経験ゼロの璃々を手玉に取る事など赤子の手をひねるより簡単だろう。

(何やってんのよ、もう！　私の貞操観念はどこに行っちゃったの？)

璃々はベッドの中でジタバタともがいた。

そもそも、噂で聞いた女優の田丸果歩との関係はどうなのだろう？

もし事実なら、いったいどういうつもりで自分にキスをしたり、デートに誘ったりするのか……

彼の真意は測りかねるし、いろいろと疑問はある。だが、今日のデートがガラスの靴を壊してしまった償いという事だけは、はっきりしていた。

(もう二度とキスなんかしない……それだけは肝に銘じておかなきゃ！)

そう固く決心すると、璃々は勢いよくベッドから起き上がった。顔を洗い髪の毛を梳(と)かしながら、今日のデートについて考える。

(でも、いったいどこに行って何をするの？)

恋愛経験がない璃々にとって、デート自体が未知の世界だ。

三上ほどハイスペックな男性なら、行き先も豪華なところに違いないし、食事をするにしても高級レストランだと思われる。

璃々が普段出かける先は、せいぜい最寄り駅近くのショッピングセンターだし、食事はもっぱらフードコートだ。

当然、クローゼットの中には、三上とのデートに着ていけるようなきちんとした洋服など一着もない。たった一日で準備できるはずもなく、誰かに相談しようにも、どう説明していいかわからないまま朝を迎えてしまった。

まずは何か口にしようと思ったが、緊張のせいか牛乳しか喉を通らない。

ベッドの上に手持ちの服を並べ、その中で一番マシだと思える洋服を着て諸々(もろもろ)の準備を済ませた。

約束の時間まで、あと四十分。

璃々のアパートから勤務先までは、電車で二駅。ドアツードアで三十分くらいだ。

(少し早いけど、家にいてもソワソワしてちっとも落ち着かない)

一足しかない白色のパンプスを履いて、同色のスカートが汚れていないか確認する。シューズボックスの上に置いた鏡で空色のシャツブラウスの襟(えり)元をピンと引っ張って伸ばした。

「よし、行こう」
徒歩五分の最寄り駅に向かい、ちょうどやってきた電車に乗り込んで一息つく。
土曜日だからか、周りは家族連れやカップルが多く、皆それぞれにおしゃれだ。
(そういえば、もうずいぶん洋服とか買ってないなぁ)
今穿いているひざ丈のスカートは、確か三年くらい前に買ったものだと記憶している。
璃々は物持ちがいいほうだし、特に物欲もない。メイク用品はプチプラ専門だし、休みの日はもっぱら家でのんびりして過ごす。
別にそれでなんの不満もなく生活できている。けれどそれでは出会いがあるはずもなく、生涯独身の未来しか見えてこない事に気づいた。
三上にも話したとおり、いつか誰かと出会って結婚したいと思っている。しかし、その夢はあまりにも漠然として現実味がない。三上という強烈なオーラを持つ男性に関わったせいか、急に自分の女子力の低さを思い知った気がする。
(なんだか、ものすごく帰りたくなってきた……)
脳裏に思い浮かぶのは、見るからにおしゃれでセレブ感溢(あふ)れる三上と、その横にいる庶民感丸出しの自分だ。
並びがおかしいし、アンバランスな事この上ない。
セレブリティの休日がどんなものかわからないが、とにかく大人しくしていたほうがいいだろう。
だが、油断するとまたキスをされて彼の掌(てのひら)の上で転がされてしまう可能性大だ。

(あんないかにも恋愛慣れしたイケメン相手に、私なんかが太刀打(たちう)ちできるわけないよ)
弱音を吐いている間にホテルの最寄り駅に到着する。
いつもなら明るく元気に従業員入口のドアを開けるところだが、今日は仕事ではないし妙にうしろめたい。
今の時間帯は比較的人の出入りは少ないが、万が一見つかったら忘れ物をしたふりをしてやりすごそうと決めた。
足早に廊下を歩き、コソコソと無人の従業員用エレベーターに乗る。
幸い、ノンストップでエグゼクティブフロアまで辿(たど)り着き、壁の端から廊下をそっと盗み見た。
(誰もいない。今がチャンス!)
壁沿いに素早く移動し「ホライゾンスイート」の入口の前に立つ。時間を確認すると、約束の午前九時より十分近く早い。しかし、今さらどこかで時間を潰すわけにもいかず、仕方なくドアを小さくノックした。
すると思いのほか早くドアが開き、三上が顔を覗かせた。
「やあ、早いね」
三上がにっこりと微笑んで璃々を部屋の中に招き入れた。今日の彼はグリーンがかったグレーのスーツに身を包み、フォーマルでありながらリラックス感のある出で立ちをしている。
「すみません、ちょっと時間調整がうまくできなくて……」
「いいよ。それだけ僕に早く会いたかったって事だろう? 僕だってそうだ」

「えっ……と、と……」
手を取られ、リビングに連れていかれる。すると、驚いた事に見知らぬ美女がソファに脚を組んで座っていた。
「あ、あの……」
状況が呑み込めず戸惑っていると、美女が立ち上がって璃々のほうに近づいてきた。
彼女は三上同様、モデル並みにスタイルがいい。
「こちらが恭平のデートのお相手の川口璃々さん？」
「そうだ。川口さん、こちらは僕の友人でスタイリスト兼メイクアップアーティストのマキだ。今日ここに来てもらったのは、君のコーディネートをしてもらうためだよ」
「私の？」
マキがにっこりと微笑み、璃々に手を差し出してきた。ハイヒール姿の彼女は、身長が三上と同じくらいある。
「はじめまして、マキで～す」
「は、はじめまして。川口璃々です」
「じゃあ、さっそく取り掛かるわね。恭平、ちょっと向こうに行っててくれる？」
マキが三上をリビングから追い払い、璃々は彼女と二人きりになった。大きな鏡のついたドレッサーの前に座らされ、髪の毛を櫛梳ってもらう。
「マキさん、なんだかすごくいい香りがしますね」

マキから上品な香水の香りがして、璃々は思わず鼻をクンと鳴らした。
「わかる？　いいでしょ、これ。調香師のカレが作ったオリジナルの香りよ」
マキが璃々のほうに身を寄せ、自分の首元を掌でそっと扇いだ。
「グリーンフローラルですね。すごく素敵な香りです」
「でしょ？　よかったらあとで分けてあげる。――今夜、恭平とベッドに入る前につけるといいわ。これ、秘密だけど媚薬成分も入ってるから」
耳元でそう囁かれ、璃々は仰天して目を真ん丸にする。
「わ、わ……私はそんなんじゃないですからっ……」
璃々が顔を赤くして首を横に振ると、マキが長い睫毛を揺らめかせながら唇を窄めた。
「そうなの？　じゃあ、まだこれからの二人なのね。初々しくていいわぁ。今後の展開を楽しみにしてるわね～」
マキがダイヤ柄のメイクボックスを取り出し、ドレッサーの上に置いた。
中は三段式のスライドトレイになっており、収納されているものはすべて高級コスメのブランド品だ。
ドレッサーの鏡は横幅も広く、部屋全体が見渡せるようになっている。
いったいこれから何が始まるのだろう？
璃々は戦々恐々としながら、鏡の中の自分を見つめ続ける。
「まずは、ネイルからいくわね」

マキに手を取られ、丁寧に爪を整えてもらった。
今までネイルケアなどまともにした事がない璃々は、それだけで緊張してしまう。
「もっとリラックスしていいのよ。肌、すごくきめが細かいのね。指の形も綺麗」
「仕事柄、油断するとすぐ手が荒れるので、しょっちゅうクリームを塗ってケアだけはしてるんです」
「だからこんなにしっとりしてるのね。お仕事もあるだろうから、すぐにオフできるものにしておくわね」
ベージュピンクのグラデーションの先に、ほんの少しだけシルバーのラメが入る。いつかテレビで見た事のある過程を経て、璃々の指先にほんのりと可愛らしい色が宿った。
「素敵……こんなのはじめてです」
「爪に色を載せるだけでも、気分がだいぶ上がるでしょ？　さて、次は顔ね。璃々ちゃんって色白よねぇ。日焼け対策はバッチリしてる感じ？」
「はい。メイクはほとんどしませんが、日焼け止めクリームだけは年中塗ってます」
「いい心掛けね。ルージュを引かないなら、リップクリームもUVカットのものを使ったほうがいいわよ」
「今度買う時は、そういう商品を選ぶ事にします」
話しながら眉をカットされ、顔にベースメイクを施される。続いてコンシーラーでそばかすをカバーしてもらい、この時点でかなり垢抜けた感じになった。

目元にはオレンジ系のアイシャドウを載せ、唇にも同色のマットなルージュを塗る。
「璃々ちゃんの髪色って、もとからこんな深みのある茶色なの？　いい感じねぇ」
「ありがとうございます。この色のおかげで、毛髪検査では、いつも先生に渋い顔をされましたけど」
楽しく会話しながら髪の毛の長さを整えてもらい、ヘアアイロンで緩いウェービーヘアにセットしてもらった。
その結果、さっきまでの見慣れたすっぴん顔が大人びた違う人の顔になった。
よく見たら確かに自分に違いない。だが、パッと見ただけでは誰なのかわからないレベルだ。
「これが私……？」
鏡を見て呆気に取られていると、背後からマキが肩をポンと叩いてきた。
「そうよ。ね？　びっくりするくらい変わるでしょ。璃々ちゃんは顔のパーツが綺麗だから特にメイクで別人になれるタイプね」
「私、自分は化粧映えしない顔だって思ってました」
璃々がそう言うと、マキが人差し指を立ててそれを横に振った。
「私に言わせれば、化粧映えしない顔なんてこの世に存在しないの。どんな女性でも、メイクひとつでどうにでも変わるのよ。もちろん、ヘアスタイルも超大事。ま、これは男にも言える事だけど」
鏡越しにパチリとウインクするマキの喉元には、大きな喉ぼとけがある。

璃々はマキの言葉に深く頷きながら、性別を超えた彼女の美貌と人あたりのよさに感じ入った。
仕上げのシェーディングパウダーを顔になじませると、もはや別人級の美人顔になった。
「マキさん、すごいです！　ヘアメイクだけで、人ってこんなに変わるんですね。なんだか気持ちまでウキウキしてきました」
璃々が興奮して声を弾ませると、マキが胸に手を当ててにっこりする。
「そう言ってくれると嬉しいわ。まさにそれが私の仕事であり、生き甲斐だもの。はい、あとはそれを着たらいつでもデートに出かけられるわよ」
マキが部屋を出ていき、璃々は恐る恐るハンガーラックに近寄った。彼女が用意してくれたのは、品のいい華やかさがあるヴィンテージライクの花柄のワンピースだ。
それに合わせたミント色のバッグとモカベージュのハイヒールも用意されている。
璃々は着ているものを脱いで、着替えをした。そして、おずおずと鏡を振り返り、そこに映る自分自身を見て小さく歓声を上げる。
「わぁ……まさに馬子(まご)にも衣裳って感じ」
これほどおしゃれをしたのは、いつぶりだろう？
少なくとも、こんなに素敵な服を着たのははじめてだ。
璃々が鏡の前で感嘆の声を上げていると、マキが三上とともにリビングに戻ってきた。
「あらぁ、かっわいいぃ～！　美人さ～ん！」
璃々を見るなり、マキが飛び上がって手を叩いた。

「さすが私！　璃々ちゃん、そのワンピ、すっごく似合ってるわよ。街中を歩いたら読者モデルとしてスカウトされちゃいそう」
マキが嬉々として話しながら、いち早く璃々のもとに駆け寄ってきた。三上はそのうしろにおり、璃々を見て満足そうな表情を浮かべている。
「ありがとうございます。ぜんぶ、マキさんのおかげです」
「どういたしまして。でも、このワンピースを選んだのは恭平なの。昨日いきなりうちの店にやってきて、入荷したてのイチオシを目ざとく見つけてお買い上げしてくれたのよ」
「お買い上げ……」
マキ曰(いわ)く、彼女は都内の繁華街でブティック兼美容サロンを開いているのだという。手渡された名刺を見ると、場所は都心を代表する高級商業地だ。
「恭平が女性にそこまでするなんてはじめてだから、びっくりしちゃった。いい？　今の璃々ちゃんは、普段のあなたとは別人なの。背筋をシャンと伸ばして堂々と振る舞いなさい。じゃ、用事も終わったし邪魔だろうから、私はとっとと帰らせてもらうわね～」
マキが早々に帰ってしまうと、璃々は急に心細くなって鏡の前でソワソワと落ち着きを失くした。
今日は休みだから、リネンカートに身を隠す事もできない。
ありもしないスカートの皺(しわ)を伸ばしていると、三上が一歩近づいてきて改めて璃々の全身を眺めた。
「思ったとおり、よく似合う」

ごく自然な感じで顎を持たれ、顔が上を向いた。
璃々は咄嗟に唇を硬く閉じて、若干仰け反るような姿勢を取る。三上はさらに歩を進め、璃々の正面で立ち止まった。
「警戒しなくても大丈夫だ。せっかくつけたルージュを、出かける前に取ってしまうわけにはいかないからね」
三上が璃々の不自然に閉じた唇を見て、ニッと笑った。
「べ、別に警戒なんか……」
「心配しなくても、しかるべき時にたっぷりと奪わせてもらうよ」
「なっ……なんですか、それ。まるで私がキスを期待してるような言い方――」
「そういうふうに聞こえたなら、失礼した。だが、君はさっきから僕の唇ばかり見て、かなり気にしてる様子だった。だから、てっきり僕とキスしたいんだと思ってね」
三上が璃々の上に屈み込むようにして、グッと顔を近づけてきた。璃々はますます背中を反らせる事になり、彼に腰を支えられる。
「そ……そんな事思ってません」
間近で見つめられ、唇にそっと息を吹きかけられた。
「それは残念。もししたくなったら、いつでも言ってくれ」
背中を引き寄せられ、傾いていた身体がまっすぐになる。早くも彼のペースに巻き込まれそうになり、璃々はなんとか落ち着こうとして小さく咳払いをした。

「あの、このワンピース、三上社長が買ったものだってマキさんが言ってましたけど――」
「そうだ。僕が今日のデートのために用意した。もちろん、バッグや靴も含めて君にプレゼントするよ。デートの費用はぜんぶ僕が持つと言っただろう？」
「確かにそうおっしゃいましたけど、これってかなり高価なものなんじゃ……」
「そう難しく考えるな。今日は一日僕に付き合ってくれるんだろう？　さあ、そろそろ出かけよう。まずは美味しいランチをご馳走するよ」
三上が左腕を璃々に差し出し、そこに手をかけるよう促してくる。
璃々は戸惑いつつも、彼の言うとおりにした。
「今日の君は僕のデート相手だろう？　それにしては距離が遠すぎる。もっと近寄ってくれるかな？」
「は、はい」
璃々が三上の身体にギリギリ触れない程度に近づくと、彼はそれを見越していたかのように自分から寄り添ってきた。その結果、ぴったりと身を寄せ合う事になってしまう。
「うん、いい感じだ。ほら、どこから見てもお似合いのカップルだろう？」
斜め前を見ると、ちょうどドレッサーの鏡に自分達が映っている。
彼の言うとおり、かなりいい感じだ。今の自分なら三上と一緒でも違和感はないし、どこへ連れていかれても場違いな感じはしないだろう。
しかし、如何せんこのような状況に慣れていないせいか、無意識に肩が窄まってしまう。

「マキも言ってただろう？　今の君はいつもの君じゃない。自信を持って堂々と振る舞えばいい」
「は……はい」
デート中、三上に恥をかかせないように気をつけなければ――そうしないと、償いどころか、さらに迷惑をかける事になってしまう。
璃々は自分にそう言い聞かせ、顎を上げて背筋をシャンと伸ばした。
「よろしい。ところで、あまり踵の高い靴を履き慣れていないようだが、足は痛くないか？」
「はい、大丈夫です。この靴、すごく革が柔らかくてまったく痛くありません」
「そうか。一応言っておくが、ここから一歩踏み出したら『ホライゾン東京』の客室清掃係としての川口璃々はいったん忘れるように」
三上にエスコートされながら入口のドアまで歩き、廊下に出る。
てっきり業務用エレベーターに向かうと思っていた璃々は、迷う事なく共有スペースのほうに歩き出した三上に戸惑う。
「えっ……三上社長、そっちに行くと人に見られちゃいますよ」
進行方向にはコンシェルジュデスクとエグゼクティブフロア専用のラウンジがある。当然従業員がいるし、三上と自分が一緒にいるところを見られてしまう。
「大丈夫だ。このフロアに常駐してる従業員は全員プロフェッショナルだし、ここで見たり聞いたりした事に関しては決して口外しない」
「そ、それはわかっています。そうじゃなくて、私と一緒なのを見られるのがまずいんじゃないか

と……」
「別にまずくはない。まあ、僕が女性をエスコートしているのを見たら、このフロアを含めた全従業員が驚くだろうな」
「だ、だったら――」
「だが今の君を見て、誰が〝川口璃々〟だと気づく？　自分から名乗るなら別だが、黙っていれば誰も君だとわからない。そうじゃないか？」
三上に言われ、璃々は上品に揺らめくワンピースの裾を見た。
なるほど、今の自分は我ながら誰かと思うほどの変身を遂げているし、黙っていればぜったいにわからないレベルだ。周囲も、まさか三上のデート相手が一介の客室清掃係だなんて想像すらしないだろう。
「逆に、僕がエグゼクティブフロアから女性を連れて下りてきたのを見たら、何も知らないスタッフは、君をスイートルームに泊まっているゲストだと思うんじゃないかな」
「わ、私がスイートルームのゲスト……!?」
思わず大きな声を出してしまい、あわてて口を噤む。もしそう思われるとしたら、なおさら正体がバレてしまうような行動は慎まなければならない。
「僕がうまくエスコートするから、君は何も心配はいらないよ。ただ、僕の事を呼ぶ時に『三上社長』はやめてくれ。いいね？」
「わかりました。では、なんとお呼びすればいいですか？」

「デートをするくらいの関係だから〝恭平〟か〝恭平さん〟だな」
「し、下の名前で……？」
「そうだ。僕も二人きりの時は君を〝璃々〟と呼ばせてもらう。ほら、もうすぐラウンジの前を通るぞ。このフロアにいる従業員にとって、君は僕が『ホライゾンスイート』に招待したエレガントなレディだ。そのつもりで」
三上に囁かれ、璃々は改めて気持ちを引き締めた。
彼のデートの相手を務めるのだから、それにふさわしいレディに見えるような振る舞いをしなければならない。
そう思いながらラウンジを通り過ぎ、コンシェルジュデスクの前を歩く。
三上がデスクにいる男性に声をかけ、コンシェルジュが二人に向かって「行ってらっしゃいませ」と言って一礼した。彼は必要以上にこちらを見たりせず、まったく圧を感じさせない。エグゼクティブフロアのゲストにとって、彼は必要不可欠でありながら、まるで空気のようにその存在を意識させない控えめな雰囲気を纏っていた。
（さすがエグゼクティブフロアのコンシェルジュだなぁ）
感心しながら三上とともに誰もいないエレベーターに乗り込む。彼はレストランのある六階のボタンを押し、璃々ににっこりと笑いかけた。
「璃々は『笹倉』で食事した事はあるか？」
実際に目を見つめられながら〝璃々〟と呼ばれ、耳朶がじんわりと熱くなる。

「いいえ、ありません。以前、店舗の清掃を担当していた時に入った事はあります」
「笹倉」というのは「ホライゾン東京」の六階にある日本料理店で、ゆったりとした店内には個室が八室ある。
「そうか。今日のランチは『笹倉』の個室を予約してある」
「え！『笹倉』でランチを？」
清掃中に同店のランチメニューを見た事があるが、昼の会席膳ともなると一人当たり三万円以上もする。
「料理長とは顔見知りか？」
「はい、一応……」
「ほかの店舗の従業員とは？」
「ほとんどの人と顔見知りです。あと、前にチャペルと宴会場の清掃をした事があるので、そこにいる人達もだいたいは知ってます」
ここの清掃員として働く事が決まった時、璃々は大いに喜んだ。そして「クリーニングワーク」の社長に頼み込んで、できるだけいろいろな部署を担当できるよう希望したのだ。
「なるほど、璃々は顔が広いんだな。だが、それだけ見た目の印象が違えば、気づかれずに済むだろう」
璃々はもちろん「ホライゾン東京」で働く者は、徹底してホテル従業員としての接客マナーを教え込まれる。担当業務により内容は違ってくるが、全従業員共通の注意事項のひとつとして、ゲス

トのプライベートを大事にする、というのがあった。
ゲストの要望があれば別だが、そうでなければ常にほどよい距離を保ち立場をわきまえた言動を心掛ける。「ホライゾン東京」が五つ星ホテルなのは、従業員のプロ意識が格段に高い事も理由のひとつだった。
おそらく、ホテル内のどこへ行っても不躾な視線を浴びる事はないだろう。ましてや個室で食事をするとなると、接する従業員も限られてくる。そうであれば正体がバレる確率はかなり低い。
（きっと大丈夫……でも、やっぱりドキドキする～！）
何せ、こんなシチュエーションははじめてで、いろいろな意味でどうにも落ち着かない。
途中の階でエレベーターが止まり、ビジネスパーソンらしい男性が乗り込んできた。彼はチラリとこちらを見て軽く会釈をしたあと、すぐに操作盤に向き直って一階のボタンを押した。
「ホライゾン東京」のリピーターには全国はもとより世界各国のエリートも多くいる。
通常の部屋でも一泊六万円以上するが、彼等は好んでここを予約してそれぞれにホテルライフを楽しむ。
施設内には各種ミーティングルームやパーティ等のレセプションが行えるホールもあり、宿泊客は優先的にそこを利用できる。そのため企業単位の顧客も多く、時には政府関係者の重要な話し合いの場になる事もあった。
六階に到着し、フロアに出る。すると、三上が自身の腕にかけている璃々の手に掌を重ねてきた。
「今の男性、璃々をずっと見てたね」

立ち読みサンプルはここまで

「そうでしたか？　気づきませんでした」
「僕を気にしながらチラチラ見てたな。璃々が可愛いから気になったんだろう」
「そんな事、はじめて言われました……」
璃々は恐縮して頬を赤く染めた。そんな璃々を、三上がにこやかな顔で見つめる。
「今の璃々には楚々とした魅力がある。男性の中にはそういった女性を特に好む者が多くいるし、かく言う僕もその一人だ」
事もなげにそんな台詞を言った三上は、璃々を連れて「笹倉」の暖簾をくぐった。
控えていた和服姿の係員に案内され、店の一番奥の個室に入る。そこは外の風景を見ながら食事ができるため、特に人気の高い部屋だ。
「すごい……。まさか自分がお客さんとして、ここに来られるなんて思ってもみませんでした」
璃々は部屋をぐるりと見回しながら、心の中で歓声を上げた。
「時間はたっぷりあるから、ゆっくりしていこう」
三上は事前にコース料理を予約しており、先付の鱧料理など、魚介を中心にした料理が次々と運ばれてきた。
どうやら三上がまとめて持ってくるように頼んでいたらしい。
彼は料理の説明に耳を傾け、時折詳しい産地などを訊ねている。係の男性はその都度的確に返事をし、最後に「ごゆっくりお召し上がりください」と言って下がっていった。
「接客態度も返事の内容も、理想的だ。気配りもできていたように思うが、璃々はどう感じた？」